

# The Creative Writing Process of Taro Tominaga's Poems Published within His Lifetime

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5717">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5717</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 富永太郎生前発表詩篇の生成過程

杉 浦 静

本稿は、富永太郎草稿の画像データベース化ための基礎作業である。本稿では、富永の生前発表の各詩篇毎に生成過程を整理し、自筆の詩帖・草稿を翻刻し、本文化した。詩篇の配列は、生前発表誌への掲載順に従っている。なお、生前発表詩篇のうち「鳥獣剥製所」については、「富永太郎「鳥獣剥製所」の生成(1)」(「大妻国文」43号、平成24年3月)に生成過程を記述したので本稿では省略する。

生成過程の最後に、参考として『富永太郎詩集』(私家版、昭和二年九月二日発行)所収本文を掲げた。この詩集は村井康男により編集されたものであり、本文校訂も同氏による。富永太郎詩の最初の刊行詩集であるので、参考として掲げることとした。

本稿に翻刻した詩帖・草稿は、神奈川近代文学館の所蔵になるものである。草稿の使用を許可された、富永一矢氏・神奈川近代文学館に感謝申し上げる。

推敲過程の記述は次の凡例にしたがう。

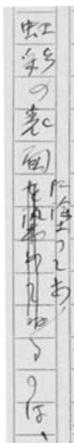
凡例

- 1 草稿の場合、まず第一形態を示す。手入れについての記述が必要な詩篇・草稿については、行頭に行番号を付す。その際、題名・副題・行アキは算入しない。

富永太郎生前発表詩篇の生成過程

① 例

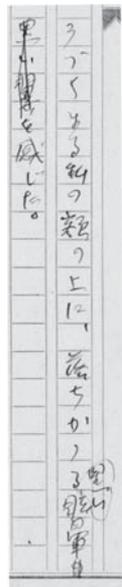
- 2 第一形態成立後の手入れは、推敲のある行の番号を掲げてその行の推敲過程を表記する。推敲過程の表記は次のとおり。異文の生じているところから「□」印を開いて、まず第一形態を示し、以下推敲段階における手入れを「↓」を用いて順に示し、推敲の最終形を記したあと、「□」印で閉じる。
- 3 削除は「…… ↓ 削除」。追加・挿入は、「ナシ ↓ ……」のように示す。
- 4 「□」内でさらに部分的推敲がある場合は、そこを【】で括って示す。
- 5 草稿における判読困難の文字、字体不明瞭の文字は、また一二画だけで書きかけの文字は、「( )」で括って表すか、または□□のように表す。推定した文字も「( )」で括って表す。
- 6 右の原則によって示しきれない場合は、「( )」を用いて小活字で説明を加える。



12行 虹彩の表面「を染めてる↓に塗つてあ」るのは、  
右は、12行目の「虹彩の表面を染めてゐるのは、」が、手入れ

②

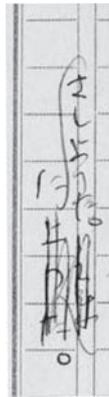
で「虹彩の表面に塗つてあるのは、」になったことを示す。



21行 うづくまる私の額の上に、落ちかゝる「ナシ↓黒い」眩暈  
「の黒い翼↓削除」を感じた。

右は、21行目の「落ちかゝる眩暈の黒い翼を感じた。」が、手  
入れて「黒い」が挿入され、「の黒い翼」が削除されて、「落ちかゝ  
る黒い眩暈を感じた。」になったことを示す。

③



25行 に「上つ【ナシ↓て来】た。↓さし上つた。」

右は、「に上つた。」↓「に上つて来た。」↓「にさし上つた。」  
の順に書き改められたことを示す。

## 1 橋の上の自画像

### 1 草稿

《草稿番号》 40101

《用紙》 「1020クジヤク印原稿紙」

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》

橋の上の自画像

今宵私のパイプは橋の上で

狂暴に煙を上昇させる。

今「?↓宵」あれらの水びたしの荷足にたりは  
す「ベ↓べ」て昇天しなければならぬ。「↓削除」  
頬被りした船頭たちを載せて。

電車らは花車だしの亡霊のやうに  
音もなく夜の中に拡散し遂げる。

（靴「を↓削除」穿「い↓き」て木橋もくきょうを踏む淋しさ。「↓!」）

私は明滅する「仁丹」の広告塔を憎む。

またすべての詞華集アントロワとカルピスソーダ水とを嫌ふ。

哀れな欲望過多症患者が

人類撲滅の志を抱いて

最後を遂げる「の↓削除」に間近い「悲壮な↓削除」夜よるだ。

蛾よ、蛾よ、

ガードの鉄柱にとまつて「ナシ↓」、「死ぬべし、死ぬべし、↓震へて、」  
夥しく産卵して死ぬべし、死ぬべし。

咲き出でた交番「ナシ↓の」赤ランプは

おまへの看護みとりには過ぎたるものだ。

juillet 1924.

《注》 末尾の日付は原文では横書き。1924（大正13）年9月17日付富  
永次郎宛葉書に、「原稿は届いたかしら」とある。

### 2 「詩帖」稿

《草稿番号》 40191-44

《用紙》 「詩帖」185-86頁

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、「詩帖」Iの85-86頁に記されたもの。書きながらの手入れを含めて示す。

橋の上の自画像

今宵私のパイプは橋の上で  
狂暴に煙を上昇させる。

今宵あれらの水びたしの荷足は  
すべて昇天しなければならぬ。↓削除  
頬被りした船頭たちを載せて。

電車らは花車の亡霊のやうに  
音もなく夜の中に拡散し遂げる。  
(靴穿で木橋を踏む淋しさ!)

私は明滅する「仁丹」の広告塔を憎む。  
またすべての詞華集とカルピスソーダ水とを嫌ふ。

哀れな欲望過多「病↓症」「?」↓患」者が  
人類「ナシ↓が↓削除」撲滅の抱いて  
最後を遂げるに間近い夜だ。

蛾よ、蛾よ、  
ガードの鉄柱にとまって、震へて、  
夥しく産卵して死ぬべし、死ぬべし。  
咲き出でた交番の赤ランプは  
おまへの看護には過ぎたるものだ。

3 「山繭」発表形

《発表誌》「山繭」創刊号（一九二四（大正一三）年二月一日  
発行）

《本文》

橋の上の自画像

今宵私のパイプは橋の上で  
狂暴に煙を上昇させる

今宵あれらの水びたしの荷足は  
すべて昇天しなければならぬ、  
頬被りした船頭たちを載せて。

電車らは花車の亡霊のやうに  
音もなく夜の中に拡散し遂げる。  
(靴穿きで木橋を踏む淋しさ!)

私は明滅する「仁丹」の広告塔を憎む。  
またすべての詞華集とカルピスソーダ水とを嫌ふ。

哀れな欲望過多症患者が  
人類撲滅の抱いて、  
最後を遂げるに間近い夜だ。

蛾よ、蛾よ、  
ガードの鉄柱にとまって、震へて、  
夥しく産卵して死ぬべし、死ぬべし、

咲き出でた交番の赤ランプは  
おまへの看護には過ぎたるものだ。

《注》「山繭」創刊号（1924（大正13）年12月1日発行）には、「詩と散文詩」の総タイトルのもとに「橋の上の自画像」と「秋の悲嘆」の二篇が掲載されている。

なお、本篇以下の本稿に掲げた全詩篇は「山繭」第二卷第三号（1926（大正15）年11月1日発行）富永太郎追悼号に再掲されている。

#### 4 詩集収録形（参考）

《収録詩集》『富永太郎詩集』（村井康男編、一九二七年九月二日発行）

《本文》

橋の上の自画像

今宵私のパイプは橋の上で  
狂暴に煙を上昇させる。

今宵あれらの水びたしの荷足は  
すべて昇天しなければならぬ、  
頬被りした船頭たちを載せて。

電車らは花車の亡霊のやうに  
音もなく夜の中に拡散し遂げる。  
（靴穿きで木橋を踏む淋しさー）

私は明滅する「仁丹」の広告燈を憎む。  
またすべての詞華集とカルピスソーダ水とを嫌ふ。

哀れな欲望過多症患者が  
人類撲滅の抱いて  
最期を遂げるに間近い夜だ。

蛾よ、蛾よ、  
ガードの鉄柱にとまつて、震へて  
夥しく産卵して死ぬべし、死ぬべし。  
咲き出でた交番の赤ランプは  
おまへの看護には過ぎたるものだ。

#### 2 秋の悲嘆

##### 1 草稿1

《草稿番号》 40102

《用紙》「20×20」原稿用紙、灰色罫

《筆記具》ブルーブラックインク・ペン

《校異》

##### 秋の悲嘆

私は透明な秋の薄暮の中に墜ちる。戦慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貪婪な樹々さへも闇を招いてはゐない。

私はたゞ微かに煙を挙げる私のパイプによつてのみ生きる。あの、ほつそりとした白陶土製のかの女の頸に、私は千の静かな接吻をも惜しみはしない。今はあの銅色の空を蓋ふ公孫樹の葉の、光沢のない非道な存在をも赦さう。オールドローズのおかつばさんは埃も立てずに土塀に沿つて行くのだが、もうそんな後姿も要りはしない。風よ、街上に光るあの白痰を掻き乱してくれるな。

私は炊煙の立ち騰る都会を夢みはしない——土瀝青色の疲れた空に

炊煙の立ち騰る都会などを。今年はみんな松「茸↓茸」を食つたか「どうか↓しら」、私は知らない。多分柿ぐらゐるは食へたのだらうか、それも知らない。黒猫と共に坐る残虐が常に私の習ひであつた：

夕暮、私は「立↓立」ち去つたかの女の残像と友である。天の方に立ち騰るかの女の胸の「皺↓皺（欄外に導線してルビを「ヒダ」と記す）」を、夢のやうに萎れたかの女の肩の「皺↓皺」を、私は昔のやうにいとほしむ。だが、かの女の髪の中に挿し入つた私の指は、昔私の心の支へであつた、あの全能の暗黒の粘状体に触れることがない。私たちは煙になつてしまつたのだらうか？私はあまりに硬い、あまりに透明な秋の空気を憎まうか？

繁みの中に坐らう。枝々の鋭角の黒みから生れ出る、かの「虚無」の性<sup>フイジオケノミ</sup> 相を「ナシ↓さへ」点検しないで済む怖ろしい怠惰が、今私には許されてある。今は降り行くべき時だ——金「属↓属」や蜘蛛の巣や瞳孔の栄える、あらゆる悲惨の市にまで。私には舵は要らない。街燈に薄光るあの枯芝生の「ナシ↓堅い」斜面に身を委せよう。それといつも変らぬ角度を保つ、錫箔のやうな池の水面を愛しよう：：私は私自身を救助しよう。

Kyoto

Octobre 1924

《注》 末尾の地名・日付は原文では横書き。本稿は、1924（大正13）年10月23日付小林秀雄宛書簡に同封されていたもの。同封の小林宛書簡には、「こんなものが出来たから近況報知がはりに送つてみる。は、あランボオばかりだな、と言つてもいゝ。とにかく日本流行の「情調派」ではないといふレットテルをつけてくれたら本望だ。出来不出来は問はず。」と書こている。

## 2 草稿 2

《草稿番号》 40103

《用紙》 「10—20」原稿用紙、セピア罫

富永太郎生前発表詩篇の生成過程

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》

秋の悲嘆

私は透明な秋の薄暮の中に墜ちる。戦慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貪婪な樹々さへも闇を招いてはゐない。

私はたゞ微かに煙を挙げる私のパイプによつてのみ生きる。あの、「ナシ↓ほつそりとした」白陶土製のかの女の頸に「？（書き損じ）↓」私は千の静かな接吻をも惜しみはしない。今はあの銅<sup>あかぐねいろ</sup>色の空を蓋ふ公孫樹の葉の、非道な存在をも赦さう。オールドローズのおかつばさは埃も立てずに土塀に沿つて行くのだが、もうそんな後姿も要りはない。風よ、街上に光るあの白痰を掻き乱してくれるな。

私は炊煙の立ち騰る都会を夢みはしない「、↓——」土瀝青色<sup>チヤン</sup>の疲れた空に炊煙の立ち騰る都会などを。今年みんな松茸を食つたかしら、私は知らない。多分柿ぐらゐるは食へたのだらうか、それも知らない。黒猫と共に坐る残虐が常に私の習ひであつた：

夕暮、私は立ち去つたかの女の残像と「共↓友」である。天の方に立ち騰るかの女の胸の皺<sup>ひだ</sup>を、夢のやうに萎れたかの女の肩の皺を、私は昔のやうにいとほしむ。だが、かの女の髪の中に挿し入つた私の指は、昔私の心の支へであつた、あの全能の暗黒の粘状体に触れることがない。私たちは煙になつてしまつたのだらうか？私はあまりに硬い、あまりに透明な秋の空気を憎まうか？

繁みの中に坐らう。枝々の鋭角の黒みから生れ出る、かの「虚無」の性<sup>フイジオケノミ</sup> 相をさへ点検しないで済む怖ろしい怠惰が、今私には許されてある「のだ↓」。今は降り行くべき時だ——金属や蜘蛛の巣や瞳孔の栄える、あらゆる悲惨の市にまで。私には舵は要らない。街燈に薄光るあの枯芝生の斜面に身を委せよう。「そ↓そ」れといつも変らぬ

角度を保つ、錫箔のやうな池の水面を愛し「や↓削除」よう…：私は私自身を救助しやう。

《注》 本稿は、1924（大正13）年10月30日付村井康男宛書簡に同封されていたもの。村井宛書簡には、「こんなものが出来た。近況報知がはりに送る。批評したまへ。手紙待つてる。／＼一〇月三〇日夜」と書いている。また、11月14日付の同じ村井宛書簡には、「先日の散文詩届いたかしら。即刻返事をよこすこと。」とも書いている。

### 3 「山繭」発表形

《発表誌》 「山繭」創刊号（一九二四（大正一三）年一月一日発行）

#### 秋の悲嘆

私は透明な秋の薄暮の中に墜ちる。戦慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貪婪な樹々さへも闇を招いてはゐない。

私はたゞ微かに煙を挙げる私のパイプによつてのみ生きる。あの、ほつそりとした白陶土製のかの女の頸に、私は千の静かな接吻をも惜しみはしない。今はあの銅色あかぐねの空を蓋ふ公孫樹の葉の、光沢のない非道な存在をも赦さう。オールドローズのおかつばさんは埃も立てずに土塀に沿つて行くのだが、もうそんな後姿も要りはない。風よ、街上に光るあの白痰を掻き乱してくれるな。

私は炊煙の立ち騰る都会を夢みはしない——土瀝青色チヤンの疲れた空に炊煙の立ち騰る都会などを。今年はまだ松茸を食つたかしら、私は知らない。多分柿ぐらゐるは食へたのだらうか、それも知らない。黒猫と共に坐る残虐が常に私の習ひであつた……

夕暮、私は立ち去つたかの女の残像と友である。天の方に立ち騰るかの女の胸の襞ひだを、夢のやうに萎れたかの女の肩の襞を、私は昔のや

うにいとほしむ。だが、かの女の髪の中に挿し入つた私の指は、昔私の心の支へであつた、あの全能の暗黒の粘状体に触れることがない。私たちは煙になつてしまつたのだらうか？ 私はあまりに硬い、あまりに透明な秋の空気を憎まうか？

繁みの中に坐らう。枝々の鋭角の黒みから生れ出る、かの「虚無」の性フイジオゲノミノ相をさへ点検しないで済む怖ろしい怠惰が、今私には許されてある。今は降り行くべき時だ——金属や蜘蛛の巣や瞳孔の栄える、あらゆる悲惨の市にまで。私には舵は要らない。街燈に薄光るあの枯芝生の斜面に身を委せよう。それといつても変らぬ角度を保つ、錫箔のやうな池の水面を愛しよう……私は私自身を救助しよう。

《注》 「銅色」のルビ「あかぐね」は原文通り。「性相」へのルビ「フイジオゲノミノ」は、「フイジオゲノミー」の誤植。草稿1・2の「一」はともに傾斜していて「ノ」のようにも見えることから、誤植と判断した。

「山繭」創刊号（1924（大正13）年12月1日発行）には、「詩と散文詩」の総タイトルのもとに「橋の上の自画像」と「秋の悲嘆」の二篇が掲載されている。なお、本篇は「山繭」第二巻第三号（1926（大正15）年11月1日発行）富永太郎追悼号に再掲されている。その際、「性相」へのルビは「フイヂオゲノミノ」となっている。

#### 4 詩集収録形（参考）

《収録詩集》 『富永太郎詩集』（村井康男編、一九二七年九月二日発行）

《本文》

#### 秋の悲嘆

私は透明な秋の薄暮の中に墜ちる。戦慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貪婪な樹々さへも闇を招いては

ゐない。

私はただ微かに煙を挙げる私のパイプによつてのみ生きる。あの、ほつそりとした白陶土製のかの女の頸に、私は千の静かな接吻をも惜しみはしない。今はあの銅色の空を蓋ふ公孫樹の葉の、光沢のない非道な存在をも赦さう。オールドローズのおかつばさんは埃も立てずに土塀に沿つて行くのだが、もうそんな後姿も要りはない。風よ、街上に光るあの白痰を掻き乱してくれな。

私は炊煙の立ち騰る都会を夢みはしない——土瀝青色の疲れた空に炊煙の立ち騰る都会などを。今年はまだ松茸を食つたかしら、私は知らない。多分柿ぐらゐは食へたのだらうか、それも知らない。黒猫と共に坐る残虐が常に私の習ひであつた……………

夕暮、私は立ち去つたかの女の残像と友である。天の方に立ち騰るかの女の胸の襜を、夢のやうに萎れたかの女の肩の襜を、私は昔のやうにいとほしむ。だが、かの女の髪の中に挟し入つた私の指は、昔私の心の支へであつた、あの全能の暗黒の粘状体に触れることがない。私たちは煙になつてしまつたのだらうか？ 私はあまりに硬い、あまりに透明な秋の透明な空気を憎まうか？

繁みの中に坐らう。枝々の鋭角の黒みから生れ出る、かの「虚無」の性。相をさへ点検しないで済む怖ろしい怠惰が、今私には許されである。今は降り行くべき時だ——金属や蜘蛛の巣や瞳孔の栄える、あらゆる悲惨の市にまで。私には舵は要らない。街燈に薄光るあの枯芝生の堅い斜面に身を委せよう。それといつも変らぬ角度を保つ、錫箔のやうな池の水面を愛しよう……………私は私自身を救助しよう。

### 3 四行詩（「瑛瑛の野外の空に」）

#### 1 断片稿1

《草稿番号》 40192-8

《用紙》「詩帖Ⅱ」13頁

富永太郎生前発表詩篇の生成過程

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》

アルカリ性「ナシ↓水」溶液にてこの身を洗へ。

《補注》 13頁には、「四行詩」断片稿に続けて、「常に暗きものに侵されつ、「界」を歩む。」「鳥獸剥製所／その建物は、常に圧しつけるやうな雪もよい〔の〕〔空〕の下にのみ立つてゐる。」「Facturd」と書かれている。

#### 2 断片稿2

《草稿番号》 40192-10

《用紙》「詩帖Ⅱ」16頁

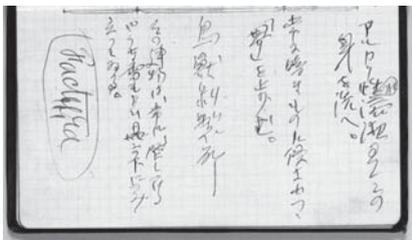
《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》

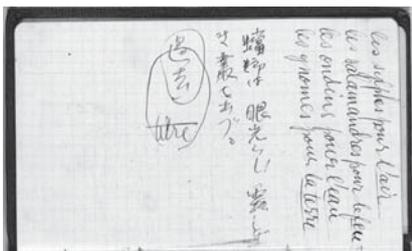
蠅螂は 眼光らし 露しげき叢を出づ。

《補注》 16頁には、四大精霊、本断片稿、過去の図が書かれている。

13頁



16頁



### 3 草稿1

《草稿番号》 40108

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

#### 四行詩

瑠瑠の野外の空に 明けの鳥一つ

阿爾加里性水溶液にて この身を洗へ

蟻螂は眼まなこ光らせ 露しげき叢を出つ

わが手は 緑玉製 [Isis→ISIS] の 御膝みの上に

### 4 草稿2

《草稿番号》 40109

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

#### 四行詩

瑠瑠の野外の空に 明けの鳥一つ

阿爾加里性水溶液にて この身を洗へ

蟻螂は眼まなこ光らせ 露しげき叢を出つ

わが手は 緑玉製 ISIS の 御膝みの上に

《注》 本稿は、「恥の歌 外三篇」との総題のもとに清書された四篇の詩中の第1篇である。これらは「(東京 文房堂製)」24字×20行の原稿用紙全4葉に書かれている。第1葉3行目に総題「恥の歌 外三篇」、5行目に作者名が「富永太郎」と記され、9行目から「四行詩」、17行目から「頌歌」、第2葉11行目から「恥の歌」、第3葉14行目から「無題 京都」が記されている。

### 5 雑誌発表形

《発表誌》 「山繭」第一巻第四号(一九二五(大正一四)年三月五日発行)

《本文》

#### 四行詩

瑠瑠の野外の空に 明けの鳥一つ

阿爾加里性水溶液にて この身を洗へ

蟻螂は眼まなこ光らせ 露しげき叢を出つ

わが手は 緑玉製 ISIS の 御膝みの上に

### 6 詩集収録形(参考)

《収録詩集》 『富永太郎詩集』(村井康男編、一九二七年九月二日発行)

《本文》

#### 四行詩

瑠瑠の野外の空に 明けの鳥一つ

阿爾加里性水溶液にて この身を洗へ  
蟻螂は眼光らせ 露しげき叢を出づ  
わが手は 緑玉製 ISS の 御膝の上に

#### 4 頌歌

##### 1 草稿1

《草稿番号》 40109

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

#### 頌歌

鋼の波に

アベラール沈み

鉛の艦に

エロイーズ浮む

『死』は半ば脣を開いて 水を恋ひ

また 燠を霊床とする

すべては わが手の 蔑にする

象牙球の腹部の内側に

《注》 本稿は、「恥の歌 外三篇」との総題のもとに清書された四篇の詩中の第2篇である。これらは「(東京 文房堂製)」24字×20行の

富永太郎生前発表詩篇の生成過程

原稿用紙全4葉に書かれている。第1葉3行目に総題「恥の歌 外三篇」、5行目に作者名が「富永太郎」と記され、9行目から「四行詩」、17行目から「頌歌」、第2葉11行目から「恥の歌」、第3葉14行目から「無題 京都」が記されている。

##### 2 草稿2

《草稿番号》 40111

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

#### 愛恋頌歌

1 鋼の波に

アベラール沈み、

鉛の艦に

エロイーズ浮む。

5 [ナシ↓骸炭は水滲に乗り

直立する彼岸花を捧げて 【東に↓削除】 走る】

「死」は半ば脣を開いて 水を恋ひ、

また 燠を霊床とする。

すべては わが手の 蔑にする

10 象牙球の腹部の内側に。

《注》 5・6行目は、末尾に追加記入の後に導線で挿入箇所を指示している。筆記具、句読点の有無から末尾二行は第一形態成立後の追加記入と判断した。

### 3 草稿3

《草稿番号》 40110

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

頌歌 (manuscript definitif)

鋼の波に

アベラール沈み

鉛の艦に

エロイーズ浮む

骸炭は滯に乗り

直立する彼岸花を捧げて走り

「死」「↓削除」は半ば脣を開いて水を恋ひ

また燠を霊床とする

すべては緑「石↓磬(上方に導線してもう一度同じ字を記す)」のみづ底に息をつく

象牙球の腹部の内側に

### 4 雑誌発表形

《発表誌》 「山繭」第一巻第四号(一九二五(大正一四)年三月

五日発行)

《本文》

頌歌

鋼の波に

アベラール沈み、

鉛の艦に

エロイーズ浮む。

骸炭は滯に乗り

直立する彼岸花を捧げて走り

「死」は半ば脣を開いて 水を恋ひ

また 燠を霊床とする

すべては 緑磬のみづ底に息をつく

象牙球の腹部の内側に

《注》 「霊床」のルビ「まどこ」は、「たまどこ」の誤植であろう。

### 5 詩集収録形(参考)

《収録詩集》 『富永太郎詩集』(村井康男編、一九二七年九月二日

発行)

《本文》

頌歌

鋼の波に

アベラール沈み、

鉛の艦に

エロイーズ浮む

骸炭は滯みそに乗り

直立する彼岸花を捧げて走り

『死』は半ば臂うでを開いて 水を恋ひ

また 燠あきを霊床たまじことする

すべては 緑簪みづらぎのみづ底そこに息をつく

象牙球だまの腹部うちらの内側に

## 5 恥の歌

### 1 断片稿

《草稿番号》 40192-12

《用紙》 詩帖Ⅱ 21頁

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》

[Hontei] 【H→削除】 hontei

わが身を【さら→攫】へ→削除]

《補注》 本稿は、「詩帖Ⅱ」21頁中央に一度書かれた後、ペンによって消されている。本稿の上下には、フランス語で日付と行動が列挙されているが、本稿の上下部に横線が引かれ、それらの日付等と区別されている。本稿上部には、横書きで、「Proposition (à Koenji) / 11 janvier (à peu près 8 heures de soir) / Attente, / Dénouement: 2-3h / 13 janv.」と書かれている。このうち「Attente,」の一行は、筆記具や書かれた位置の関係から、下部の記述の時期に書かれたと推定される。下部には「Réponse: 15 jan. (soir) / Visit: 18 jan. (soir) / Elle m'accueille's avec son regard charmant / envoi du livre: 28 jan. / (Pas de réponse) / Pas de réponse, aujourd'hui / (31 jan.)」と書かれている。このうち一行目は、上部と同じ筆記具

により書かれている。二行目以下は、一行目より濃い色のインクの筆記具により書かれている。このインクの色は、上部の「Attente,」と同一である。「恥の歌」断片稿の書かれた筆記具は、上部の大部分及び下部の第一行に用いられたものと同ーである。

以上から、上部に書かれているような「Proposition」(求婚か?)のアクションの結果が不調と思ひ込んだ時点で、本稿を記入したが、二日後の晩に何等かの「Réponse」があった後に、本稿は削除されたと推定できる。なお、ここに記入されている日付は、大正14(1925)年1月から2月のものである。

### 2 詩帖稿

《草稿番号》 40192-13

《用紙》 詩帖Ⅱ 22頁

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》

[ナシ→恥の歌(次頁右端からの導線により)]

[Hontei] hontei

眼玉の蜻蛉とんぼ【。→、】

わが身を攫くわへ。

わが身を咬くへ。

[Hontei] hontei

燃え立つ 焔くも爐ろ

わが身を【燻いぶせ。→焦がせ。】

わが身を【潰つぶせ。→熔かせ。】

[Hontei] hontei

干着ひいた 咽喉のど

[Hontei] hontei

わが身を 涸らせ。  
わが身を 曝らせ。

Hontei hontei

おまへは泥だ

※題名をのぞいた詩の全体を、大きな斜線を用いて削除している。

《注》 本稿が記入されている詩帖Ⅱの22頁の前頁には、「恥の歌」断片稿が記入されている。また、その上下部分には、ある女性への「Proposition」及びその不調な「Réponse」が時系列に従って書かれている。それに続く頁である。

### 3 草稿1

《草稿番号》 40107

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫2枚

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

冒頭2行目に天から6字下げでタイトル。本文は4行目から始まる。

### 恥の歌

1 Hontei hontei

眼玉の 蜻蛉

わが身を 攫へ、

わが身を 啖へ。

5 Hontei hontei

燃え立つ 焔爐

わが身を 【燃や↓焦が↓燃や】せ、↓焦がせ

わが身を 【どやせ。↓鎔かせ】

Hontei hontei

10 干【□↓割れ】た 咽喉、

わが身を 涸らせ、

わが身を 曝らせ。

Hontei hontei

おまへは

15 泥だ!

《注》 10行目の難読文字は次のとおり



### 4 草稿2

《草稿番号》 40109

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

左半冒頭2行目に天から8字下げでタイトル。本文は3

行目から始まるが、題名と第1連第1行の間に赤インクで、  
一行アケの指定がある。

### 恥の歌

Honte! honte! オント オント  
Honte! honte! オント オント  
眼玉の 蜻蛉とんぼ  
わが身を 攫へさら  
わが身を 啖へく

Honte! honte! オント オント  
燃え立つ 焜爐こんろ  
わが身を 焦がせ  
わが身を 鎔かせ

Honte! honte! オント オント  
Honte! honte! オント オント  
干割れた 咽喉のんど  
わが身を 涸らせ  
わが身を 曝らせ

Honte! Honte! オント オント

おまへは

泥だ

《注》 本稿は、「恥の歌 外三篇」との総題のもとに清書された四篇の詩中の第3篇である。これらは「(東京 文房堂製) 24字×20行の原稿用紙全4葉に書かれ、第1葉3行目に総題「恥の歌 外三篇」、5行目に作者名が「富永太郎」と記され、9行目から「四行詩」、17行目から「頌歌」、第2葉11行目から「恥の歌」、第3葉14行目から「無題 京都」が記されている。各詩篇の間は二行アキで書かれている。

本稿には、題名と本文1行目の間に、赤ペンで挿入記号と「アケル」との指定がある。また、第1連と第2連の間に記号と「二行アケ」の指定、第2連と第3連の間、第3連と第4連の間にも記号と「二行アケ」の指定が入れられている。

### 5 雑誌発表形

《発表誌》「山繭」第一卷第四号（一九二五（大正一四）年三月五日発行）

### 《本文》

### 恥の歌

Honte! honte! オント オント  
Honte! honte! オント オント  
眼玉の 蜻蛉とんぼ  
わが身を 攫へさら  
わが身を 啖へく

Honte! honte! オント オント  
Honte! honte! オント オント  
燃え立つ 焜爐こんろ  
わが身を 焦がせ  
わが身を 鎔かせ

干割れた 咽喉  
わが身を 涸らせ  
わが身を 曝らせ

Hontei hontei  
Hontei Hontei

おまへは

泥だ

## 6 詩集収録形(参考)

《収録詩集》『富永太郎詩集』(村井康男編、一九二七年九月二日発行)

《本文》

恥の歌

眼玉の 蜻蛉  
わが身を 攫へ  
わが身を 啖へ

Hontei hontei  
Hontei hontei

燃え立つ 焔爐  
わが身を 焦がせ  
わが身を 鎔かせ

Hontei hontei  
Hontei hontei

干割れた 咽喉  
わが身を 涸らせ  
わが身を 曝らせ

Hontei Hontei  
Hontei Hontei

おまへは

泥だ!

## 6 無題

### 1 草稿1

《草稿番号》 40104

《用紙》「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》ブルーブラックインク・ペン

《校異》本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。題名はなく、冒頭に7字下げで「○」。

○

おまへの歯は「ナシ↓□(1マスアケ)」よく切れるさうな。

山々の膚が、あんなに赤く  
夕「日↓陽」で爛らされた「鏡鉢を↓cymbalを」  
焦々して摩り合せてゐる。

おまへはもう「ナシ↓□(1マスアケ)」暗い部屋へ帰つておくれ。

おまへの顎が薄明を食べてゐる橋の下で

友禪染を晒すのだとかいふ「黒↓黝」い水が  
産卵を了へた蜉蝣の羽根を滲ませる。

おまへはもう「ナシ↓□（1マスアケ）」暗い部屋へ帰つておくれ。

色褪せた造りもののおまへの「ナシ↓四肢の」花々で

あんな貧血の柳を飾つてやることはない。

コンクリートの岸壁は 思ひのまゝに白けさせよう。

おまへはもう「ナシ↓□（1マスアケ）」暗い部屋へ帰つておくれ。

ああ、おまへの歯は「ナシ↓□（1マスアケ）」よく切れるさうな。

Décembre 1924

《注》 末尾日付は原文横書き。

## 2 草稿2

《草稿番号》 40105

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

無題 「ナシ↓京都〔「des souvenirs」の右側に後の書き入れ〕

「ナシ↓富倉次郎に〔avec des souvenirs【moroses→mornes】〕」

おまへの歯は よく切れるさうな。

山々の「ナシ↓皮」膚が、あんなに赤く

夕陽で爛らされた cymba 「↓」（書き直）」eを

富永太郎生前発表詩篇の生成過程

焦々して搾り合せてゐる。

おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ。

おまへの顎が 薄明を食べてゐる橋の「上↓下」で

友禪染を晒すのだとかいふ黝い水が

産卵を終へた蜉蝣の羽根を滲ませる。

おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ。

色褪せた造りもののおまへの四肢の花々で、

「あんな↓削除」貧血の柳「ナシ↓ら」を飾つてやることはない。

コンクリートの「ナシ↓護」岸「壁↓堤」は 思ひのまゝに白けさせよう。

おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ。

ああ おまへの歯は よく切れるさうな。

《注》 本稿は、「詩三篇」との総題のもとに清書された3篇の詩中の第1篇である。これらは「(東京 文房堂製)」24字×20行の原稿用紙全5葉に書かれ、第1葉2行目に総題「詩三篇」、4行目に作者名が「富永太郎」と記され、6行目から「無題」、第2葉11行目から「熱情的なフーガ(旧稿)」、第4葉2行目から「無題(旧稿)」が記入されている。草稿には、印刷のための指定が入れられている。第1葉右上部には「余白ヲ充分ニ取ル」と書かれている。また、第1葉7行目の「富倉次郎に」には「六↓五」号、「(avec des souvenirs【moroses→mornes】)」にも「六↓五」号」との活字の号数指定がなされている。

## 3 草稿3

《草稿番号》 40109

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

無題 京都

富倉次郎に

(avec des souvenirs mornes)

おまへの歯は よく切れるさうな

山々の皮膚が あんなに赤く

夕陽で爛らされた鏡鉢を

焦々して 摺り合せてゐる

おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ

おまへの顎が 薄明を食べてゐる橋の下で

友禅染を晒すのだとかいふ黝い水が

産卵を終へた蜉蝣の羽根を滲ませる

おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ

色褪せた造りもののおまへの四肢の花々で

貧血の柳らを飾つてやることはない

コンクリートの護岸堤は 思ひのまゝに白けさせよう

おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ

ああ おまへの歯はよく切れるさうな

《注》 本稿は、「恥の歌 外三篇」との総題のもとに清書された四篇の詩中の第4篇である。これらは「(東京 文房堂製)」24字×20行の原稿用紙全4葉に書かれ、第1葉3行目に総題「恥の歌 外三篇」、5行目に作者名が「富永太郎」と記され、9行目から「四行詩」、17行目から「頌歌」、第2葉11行目から「恥の歌」、第3葉14行目から「無題 京都」が記入されている。各詩篇の間は二行アキで書かれている。

草稿には、印刷のための指定が入れられている。第3葉14行目の「京都」には「5」、「富倉次郎」には「5」との活字の大きさの指定がなされている。また、19行の上部には「一行アケ」とある。なお19行目はもともと1行空いている。

#### 4 雑誌発表形

《発表誌》 「山繭」第一巻第四号(一九二五(大正一四)年三月五日発行)

《本文》

無題 京都

富倉次郎に

おまへの歯は よく切れるさうな

山々の皮膚が あんなに赤く

夕陽で爛らされた鏡鉢を

焦々して 摺り合せてゐる

おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ

おまへの顎が 薄明を食べてゐる橋の下で

友禅染を晒すのだとかいふ黝い水が  
産卵を終へた蜉蝣の羽根を滲ませる  
おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ

色褪せた造りものの おまへの四肢の花々で  
貧血の柳らを飾つてやることはない  
コンクリートの護岸堤は 思ひのままに白けさせよう  
おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ

ああ おまへの歯はよく切れるさうな

## 5 詩集収録形(参考)

《収録詩集》『富永太郎詩集』(村井康男編、一九二七年九月二日発行)

《本文》

無題 京都

富倉次郎に

おまへの歯は よく切れるさうな

山々の皮膚が あんなに赤く  
夕陽で爛らされた鏡鉢を  
焦々して 摺り合せてゐる

おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ

おまへの顎が、薄明を食べてゐる橋の下で  
友禅染を晒すのだとかいふ黝い水が

富永太郎生前発表詩篇の生成過程

産卵を終へた蜉蝣の羽根を滲ませる  
おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ

色褪せた造りものの おまへの四肢の花々で  
貧血の柳らを飾つてやることはない  
コンクリートの護岸堤は 思ひのままに白けさせよう  
おまへはもう 暗い部屋へ帰つておくれ  
ああ おまへの歯はよく切れるさうな

## 7 断片

### 1 草稿

《草稿番号》 40112

《用紙》「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫  
4枚

《筆記具》ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降  
に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、  
20字×20行の字詰めとして使用している。

本稿の第一形態は、ペンでブルーブラックインクを用い  
てきれいに書かれたもの。内容は次のとおり。

1 \* \* \*

私には群衆が絶対に必要であつた。徐々に来る私の肉体の破壊を  
賭けても、必要以上の群衆を喚び起すことが必要であつた。日々の禁  
圧が私の肉体に「齋す音↓削除」の上に立てる音はする分不吉であつた。  
5 私は幾日も「悲↓息苦」しい夢をみつづけ「た。↓【乍↓なが】」ら  
街を歩いた。濃い群衆は常に私の頭の上で蠢めいてゐた。時々、飾窓

の中にある□□↓駝鳥の「羽」「ナシ」↓根「附のボンネットや、洋服屋の店先にある胸の張った蠟人形や、人間の手で造られてはならないほど滑らかに磨かれた象牙細工や、高い天井から吊り下げられた紅い腸10詰」が無作法に私を呼び覚ました。↓などに依つて、私は無作法に呼び覚まされた。」それから、また、私は濃緑色の夢の中に墜ちて行つた。

私は人生の中に劇を見る興味を急激に失つて行つた、従つて「たいて」さういふ能力をも。私は人生の額縁を失つてしまつた。——居職らしい繊細な手をした中年の男が、華車に組み合はされた膝の上に15立てた胡弓を弾いて「ゐ（書きかけ）↓削除」ゐるのが硝子戸越しに見える。傍に坐つて、真面目な顔をして竹の鼓で合の手を入れてゐる「ナシ」↓病「弱」「さうな↓らしい」兄は、私がこの店の前を通る一瞬間前に美しい「獺を母親として生れた」「ものである↓のに相違ない」【↓のである。】↓「（のに相異なる）に消し線」のである。そして、私が

20こゝを通り過ぎるや否や、永久に消えてしまふのである。あそここの乾物店の店先で、大声に喚きながら麻雀を闘はせてゐるからだの大きな中年の太った夫婦は、もうぢき油臭い二「人」↓削除「つ」のからだを並べて「淋」↓削除「眠るだらう、だが、南」□↓京「鼠の巢のやうなビスケットの箱の中で。これは私に嫌悪を齎すことが出来ない。25だが、かなりの不安を以て私を満たした。かういふ風にして、私の失格は一つ一つ行はれて行つた。私は長い夢の中で、悲しくそれを意識した。

だが、これらの失格も、結局、私の純粹さから起つたものだといふことが、その後、間もなく示された。私はたゞ悲しげに歩行の方向を30変へた。そして、燃えるエデンのやうに超自然的「の↓な」歓喜を夢みながら、悲しんで歩「ん↓ん」だ。

\* \*\*

夜、私は、古着の競売場、茶館、または居酒屋に在つて、未知の鼻音の狂熱的な蒐集「物↓者」であつた。これらの新奇な鼻音と、交流

する世界の諸潮流の海鳴りとが、私の頭蓋中で互のアツソナンスを發35見し、響かせ合つた。——私は誇りを以て沈黙した。そして、花のやうに衰弱を「（重の書きかけ）↓受」けた。

\* \*\*

夜、最も忌はしい酒亭が「（私）の書きかけ」↓削除「辛うじて私を40固定させた。最も下等な欲望らが躍動する、さまざまの顔面」の線を組み立てる↓の「線の上に、「？」↓や」つとひつかかつて「ナシ」↓支へられてゐる私自身を見出すのが暫であつた。逸□が私「（の）↓に」用意されてあつた。「私（は）↓削除」指先によつて私に加へられた柔しきだ。火と一緒に考へてゐた。火よ！失つてしまつた畜群45「に」□↓削除「の夢よ！

\* \*\*

又、——衰弱の一形式。  
厭はしい太陽に照されて舗石の上に並ぶ跛蹇<sup>かたあ</sup>らが、無限の羨望を以て私を牽いた。何者をも犯さなかつたかれらの腕が、眼「の失↓を」50持たぬ蠕虫の黒い眠りのやうに、無限の羨望を以て私を牽いた。しかし、投げ出された膝がしらの切り口は、ギオレット色の花傘を開いて私の蒸発を祝福した。——船具を忘れ、鳥を忘れ、私は黒い空気の中で、不潔な老婆らと睫毛「について会話した、↓の周囲を舞踏した。」私は笑ひ声のやうに帰り途を見失つた。太陽は私に苦くあつた。太陽55はいつものやうに苦くあつた……

《補注》 □で示した難読文字は、草稿では次の様に書かれている。

7行  23行  45行 

右に対してブルーブラックインクで次の手入れがなされている。

- 3行 必要であつた。「ナシ↓さういふ」日々の禁圧が私の「肉体に  
↓削除」の上に立てる音は「ずる分↓削除」不吉であつた。
- 5行 私は幾日も「息苦しい↓悲しい」夢をみつづけながら街を歩いた。
- 7行 洋服屋の店先に「ある胸の張つた↓せり出してゐる」「ナシ↓  
髪の毛や睫毛を植ゑられた」蠟人形や、
- 9行 象牙細工や、「高い天井から吊り下げられた紅い腸詰↓紅く彩  
られた巨大な豚の丸焼き」「などに依つて、私は無作法に呼び覚ま  
された。↓などが無作法に私を呼び覚ました。」
- 11行 「ナシ↓私は目醒め、」それから、また、「私は↓削除」「ナシ  
↓無抵抗に」濃緑色の夢の中に墜ちて行つた。
- 12行 「ナシ↓私は夢の中で或る失格をした。【こゝにそれがある。  
↓削除】——私は人生の中に
- 12行 劇を見る「興味↓熱情」を急激に失つた、従つてさういふ能力  
をも。
- 13行 「私は人生の額縁を失つてしまつた。↓削除」——居職「ナシ  
↓人」らしい繊細な手をした「中年の↓若い」男が、
- 16行 傍に坐つて、「真面目な↓こまつちやくれた」顔をして竹の鼓  
で合の手を入れてゐる病弱らしい「ナシ↓男の」児は、「ナシ↓私  
にとつては、↓削除」私が
- 18行 美しい「ナシ↓川」かほろ（上部に「美しい川かほろ」と確認の記入あり）  
を母親として生れた「のである。↓。」
- 20行 否や、「ナシ↓二人とも」「永久に消えてしまふ【のである。↓。】  
↓昇天する。——あそこの乾物店
- 21行 闘はせてゐる「からだの大きな↓削除」中年の「ナシ↓太つた」  
夫婦は、
- 23行 南京鼠の巢のやうな「ナシ↓小さな↓かあいらしい」ビスケツト  
24行 中で。「これは私に嫌悪を齎すことが出来ない。↓削除↓（生  
キ）として）これは私に嫌悪を齎すことが出来ない。【だが、↓そ

- の代り、【かなりの不安を以て私を満たした。↓削除↓（生き」として）その代りかなりの不安を以て私を満たした。」「ナシ↓私は「現在」の位置する点を見失つてしまつた。世界はかなり軽く私の足許から飛び去り易くなつてゐた。」「かういふ風にして、私の失格は一つ一行はれて行つた。↓削除」私は
- 28行 「だが、↓しかし、↓削除」「これらの↓かういふ↓削除」「失格も、結局、私の純粹さから起つたものだといふことが、その後、間もなく【ナシ↓私に↓削除】示された。↓削除」私はたゞ「悲しげに↓（？）↓もの【鬱↓倦】い」歩行の方向を変へた。
- 33行 茶館、「ナシ↓最も雑踏の街衢、」または
- 34行 あつた。「ナシ↓不潔な【奇の書きかけ？】↓削除」燈火の下を飛び交ふ、これらの
- 35行 発見し「ナシ↓合ひ」、響かせ
- 38行 「\*\*↓削除」（上部に弧線を引き前の連と後の連を結合する）
- 40行 最も「下等な↓卑しい」欲望ら「が↓の」□↓浮」動する、さまざまの
- 注 右40行の難読文字は次のとおり
- 42行 見出す「の↓こと」が「暫↓屢々」であつた。「ナシ↓私は（雄辯に↓削除）「逸□【が私に用意されてあつた。↓し「易」くなつてゐた。】↓削除」「ナシ↓私は、額の皺や鼻の小皺の上を、血に足をとられて這ひまはる一匹の蠅であつた。（何と充分に、君たちの顔は腐つてゐたことか！）」「ナシ↓——ああ、さまざま【な↓の】日に、」指先によつて「私に↓削除」加へられた柔しき「だ↓よ！」「火と一緒に考へてゐた。↓削除」火よ！失「つてしまつた↓はれた」畜群の夢よ！

注 右42行の難読文字は次のとおり



48行 厭はしい「太陽に照されて↓、ああ、涯の無い灰色の」舗石の上に「並↓並んで叫」ぶ跛蹇かたゑ「ら↓の群」が、

49行 「無限の羨望を以て私を牽いた。何者をも犯さなかつたかれらの腕が、↓削除」眼を持たぬ

50行 私を牽いた。「しかし↓削除」「ナシ↓しかし、私の眼は、缺けた朽ちた小児の二の腕に、【未だあつた↓削除】【ナシ↓陽に光る（産毛）の前に挿入しようとした後ここに挿入】新鮮な【ナシ↓陽に光る↓削除（「新鮮な」の前に入れる）】産毛うぶげを発見するに終つた。」投げ出された

51行 私「蒸↓出」発↑上昇」を祝福した。

52行 — 船具を忘れ、「ナシ↓海」鳥を忘れ、「ナシ↓純白のハンケチの雲を忘れ、」私は

54行 見失つた。「右肩に「生き」と記すが、のちにこれを削除）太陽は私に苦くあつた。↓削除」太陽はいつものやうに苦「く↓「か」↓く」「あ↓削除↓あ」つた……

以上の手入れ結果を整理して示せば、次のとおり。

\* \* \*

私には群衆が絶対に必要であつた。徐々に来る私の肉体の破壊を賭けても、必要以上の群衆を喚び起すことが必要であつた。さういふ日々の禁圧が私の上うへに立てる音は不吉であつた。

私は幾日も悲しい夢をみつづけながら街を歩いた。濃い群衆は常に私の頭の上で蠢めいてゐた。時々、飾窓の中にある駝鳥の羽根附のボンネットや、洋服屋の店先にせり出してゐる、髪の毛や睫毛を植ゑられた蠟人形や、人間の手で造られてはならないほど滑らかに磨かれた象牙細工や、紅く彩られた巨大な豚の丸焼きなどが無作法に私を呼び覚ました。私は目醒め、それから、また、無抵抗に濃緑色の夢の中に墜ちて行つた。

\*\*

私は夢の中で或る失格をした。——私は人生の中に劇を見る熱情を急激に失つた、従つてさういふ能力をも。——居職人らしい繊細な手をした若い男が、華車に組み合はされた膝の上に立てた胡弓を弾いてゐるのが硝子戸越しに見える。傍に坐つて、こまつちやくれた顔をして竹の鼓で合の手を入れてゐる病弱らしい男の児は、私がこの店の前を通る一瞬間前に美しい川瀬かはうせを母親として生れた。そして、私がかゝるを通り過ぎるや否や、二人とも昇天する。——あその乾物店の店先で、大声に喚きながら麻雀マオチヤンを闘はせてゐる中年の太った夫婦は、もうぢき油臭い二つのからだを並べて眠るだらう、だが、南京鼠の巢のやうなかあいらしいビスケットの箱の中で。これは私に嫌悪を齎すことが出来ない。その代り、かなりの不安を以て私を満たした。私は「現在」の位置する点を見失つてしまつた。世界はかなり軽く私の足許から飛び去り易くなつてゐた。私は長い夢の中で、悲しくそれを意識した。

私はたゞもの倦い歩行の方向を変へた。そして、燃えるエデンのやうに超自然的な歓喜を夢みながら、悲しんで歩んだ。

\*\*

夜、私は、古着の競売場、茶館、最も雑踏の街衢、または居酒屋に在つて、未知の鼻音の狂熱的な蒐集者であつた。不潔な燈火の下を飛び交ふ、これらの新奇な鼻音と、交流する世界の諸潮流の海鳴りとが、私の頭蓋中で互のアツソナンスを発見し合ひ、響かせ合つた。——私は誇りを以て沈黙した。そして、花のやうに衰弱を受けた。

夜、最も忌はしい酒亭が辛うじて私を固定させた。最も卑しい欲望らの浮動する、さまざまの顔面の線の上に、やつとひつかかつて支へられてゐる私自身を見出すことが屢々であつた。私は、額の皺や鼻の小皺の上を、血に足をとられて這ひまはる一匹の蠅であつた。（何と

充分に、君たちの顔は腐つてゐたことか！——ああ、さまざまの日に、指先によつて加へられた柔しさよ！火よ！失はれた畜群の夢よ！

\*  
\*\*

又、——衰弱の一形式。

厭はしい、ああ、涯の無い灰色の舗石の上に並んで叫ぶ跛蹇の群が、眼をもたぬ蠕虫の黒い眠りのやうに、無限の羨望を以て私を牽いた。しかし、私の眼は、缺け朽ちた小児の二の腕に、陽に光る新鮮な産毛を発見するに終つた。投げ出された膝がしらの切り口は、ギオレット色の花傘を開いて私の上昇を祝福した。——船具を忘れ、海鳥を忘れ、純白のハンケチの雲を忘れ、私は黒い空気の中で、不潔な老婆らと睫毛の周囲を舞踏した。私は笑ひ声のやうに帰り途を見失つた。太陽はいつものやうに苦くあつた……

## 2 雑誌発表形

《発表誌》「山繭」第一巻第六号（一九二五（大正一四）年五月一日発行）

《本文》

断片

私には群衆が絶対に必要であつた。徐々に来る私の肉体の破壊を賭けても、必要以上の群衆を喚び起すことが必要であつた。さういふ日々の禁圧が私の上に立てる音は不吉であつた。

私は幾日も悲しい夢を見つゞけながら街を歩いた。濃い群衆は常に私の頭の上で蠢めいてゐた。時々、飾窓の中にある駝鳥の羽根附のボンネットや、洋服屋の店先にせり出してゐる、髪の毛や睫毛を植ゑられた蠟人形や、人間の手で造られてはならないほど滑らかに磨かれた象牙細工や、紅く彩られた巨大な豚の丸焼きなどが無作法に私を呼び

覚ました。私は目醒め、それから、また、無抵抗に濃緑色の夢の中に墜ちて行つた。

\*  
\*\*

私は夢の中で或る失格をした。——私は人生の中に劇を見る熱情を急激に失つた、従つてさういふ能力をも。——居職人らしい繊細な手をした若い男が、華車に組み合はされた膝の上に立てた胡弓を弾いてゐるのが硝子戸越しに見える。傍に坐つて、こまつちやくれた顔をして竹の鼓で合の手を入れてゐる病弱らしい男の児は、私がこの店の前を通る一瞬間前に美しい川獺を母親として生れた。そして、私がこゝを通り過ぎるや否や、二人とも昇天する。——あその乾物店の店前で、大声に喚きながら麻雀を闘はせてゐる中年の太った夫婦は、もうちき油臭い二つのからだを並べて眠るだらう、だが、南京鼠の巢のやうななあいらしいビスケットの箱の中で。これは私に嫌悪を齎すことが出来ない。その代り、かなりの不安を以て私を満たした。私は「現在」の位置すを点を見失つてしまつた。世界はかなり軽く私の足許から飛び去り易くなつてゐた。私は長い夢の中で、悲しくそれを意識した。

私ばたゞもの倦い歩行の方向を変へた。そして、燃えるエデンのやうに超自然的な歓喜を夢みながら、悲しんで歩んだ。

\*  
\*\*

夜、私は、古着の競売場、茶館、最も雑踏の街衢、または居酒屋にあつて、未知の鼻音の狂熱的な蒐集者であつた。不潔な燈火の下を飛び交ふ、これらの新奇な鼻音と、交流する世界の諸潮流の海鳴りとが、私の頭蓋中で互の協和音を発見し合ひ、響かせ合つた。——私は誇りを以て沈黙した。そして、花のやうに衰弱を受けた。

夜、最も忌はしい酒亭が辛うじて私を固定させた。最も卑しい欲望らの浮動する、さまざまの顔面の線の上に、やつとひつかかつて支へ

られてゐる私自身を見出すことがしばしばであつた。私は、額の皺や鼻の小皺の上を、血に足をとられて這ひまはる一匹の蠅であつた。(何と充分に、君たちの顔は腐つてゐたことか!)——ああ、さまざまの日に、指先によつて加へられた柔しきよ!火よ!失はれた畜群の夢よ!

\*  
\*\*

又、——衰弱の一形式。

厭はしい、涯の無い灰色の舗石の上に並んで叫ぶかたるの群が、眼をもたぬ蠕虫の黒い眼りのやうに、無限の羨望を以て私を牽いた。しかし、私の眼は、缺け朽ちた小児の二の腕に、陽に光る新鮮な産毛を発見するに終つた。投げ出された膝がしらの切り口は、ギョレット色の花傘を開いて私の上昇を祝福した。——船具を忘れ、海鳥を忘れ、純白のハンケチの雲を忘れ、私は黒い空気の中で、不潔な老婆らと睫毛の周囲を舞踏した。私は笑ひ声のやうに帰り途を見失つた。太陽はいつものやうに苦くあつた……

### 3 詩集収録形(参考)

《収録詩集》『富永太郎詩集』(村井康男編、一九二七年九月二日

発行)

《本文》

断片

私には群衆が絶対に必要であつた。徐々に来る私の肉体の破壊を賭けても、必要以上の群衆を喚び起すことが必要であつた。さういふ日々の禁圧が私の上に立てる音は不吉であつた。

私は幾日も悲しい夢を見つづけながら街を歩いた。濃い群衆は常に私の頭の上で蠢めてゐた。時々、飾窓の中にある駝鳥の羽根附のボ

ンネットや、洋服屋の店先にせり出してゐる、髪の毛や睫毛を植ゑられた蠟人形や、人間の手で造られてはならないほど滑らかに磨かれた象牙細工や、紅く彩られた巨大な豚の丸焼きなどが無作法に私を呼び覚ました。私は目醒め、それから、また、無抵抗に濃緑色の夢の中に墜ちて行つた。

\*  
\*\*

私は夢の中で或る失格をした。——私は人生の中に劇を見る熱情を急激に失つた、従つてさういふ能力をも。——居職人らしい繊細な手をした若い男が、華車に組み合はされた膝の上に立てた胡弓を弾いてゐるのが硝子越しに見える。傍に坐つて、こまつちやくれた顔をして竹の鼓で合の手を入れてゐる病弱らしい男の児は、私がこの店の前を通る一瞬間前に美しい川獺を母親として生れた。そして、私がここを通り過ぎるや否や、二人とも昇天する。——あそここの乾物店の店先で、大声に喚きながら麻雀を闘はせてゐる中年の太った夫婦は、もうちき油臭い二つのからだを並べて眠るだらう、だが、南京鼠の巢のやうなかはいらしいビスケットの箱の中で。これは私に嫌悪を齎すことが出来ない。その代り、かなりの不安を以て私を満たした。私は「現在」の位置する点を見失つてしまつた。世界はかなり軽く私の足許から飛び去り易くなつてゐた。私は長い夢の中で、悲しくそれを意識した。私はただもの倦い歩行の方向を変へた。そして、燃えるエデンのやうに超自然的な歓喜を夢みながら、悲しんで歩んだ。

\*  
\*\*

夜、私は、古着の競売場、茶館、最も雑踏の街衢、または居酒屋にあつて、未知の鼻音の狂熱的な蒐集者であつた。不潔な燈火の下を飛び交ふ、これらの新奇な鼻音と、交流する世界の諸潮流の海鳴りとが、私の頭蓋中で互の協和音を発見し合ひ、響かせ合つた。——私は誇りを以て沈黙した。そして、花のやうに衰弱を受けた。

夜、最も忌はしい酒亭が辛うじて私を固定させた。最も卑しい欲望らの浮動する、さまざまの顔面の線の上に、やつと引掛って支へられてゐる私自身を見出すことがしばしばであった。私は、額の皺や鼻の小皺の上を、血に足をとられて這ひまはる一匹の蠅であった。(何と充分に、君たちの顔は腐つてゐたことか!) —— ああ、さまざまの日に、指先によつて加へられた柔しさよ! 火よ! 失はれた畜群の夢よ!

\*  
\*\*

又、——衰弱の一形式。

厭はしい、涯の無い灰色の舗石の上に並んで叫ぶかたるの群が、眼をもたぬ蠕虫の黒い眠りのやうに、無限の羨望を以て私を牽いた。しかし、私の眼は、缺け朽ちた小児の二の腕に、陽に光る新鮮な産毛<sup>うぶげ</sup>を発見するに終つた。投げ出された膝がしらの切り口は、ギョレット色の花傘を開いて私の上昇を祝福した。—— 船具を忘れ、海鳥を忘れ、純白のハンケチの雲を忘れ、私は黒い空気の中で、不潔な老婆らと睫毛の周囲を舞踏した。私は笑ひ声のやうに帰り途を見失つた。太陽はいつものやうに苦くあつた……

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C)) 課題番号 23520238

「富永太郎直筆原稿の画像データベース化による文学テキストの生成研究」の助成を受けたものである。